

慈眼山遺跡 11 次

2015年

日田市教育委員会

序 文

この報告書は、当委員会が平成25年度に宅地造成工事に伴って発掘調査を行った慈眼山遺跡11次調査の内容をまとめたものです。

調査では、中世の溝や土坑などが発見されました。これまで本遺跡内で行われてきた調査では15～16世紀の生活痕跡が見つかっており、それらの成果と合わせて、大友姓日田氏が支配する時代の様子を垣間見ることができる成果を得られました。

こうした発掘調査の成果をまとめた本書が、今後、文化財の保護や普及啓発、地元桂林地区の歴史を知る手掛かりとして、また学術研究等に活用いただければ幸いです。

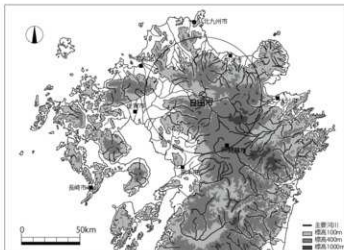
最後に、調査に対するご理解やさまざまなご協力を賜りました関係者のみなさま、中秋の候とはいえ長引く暑さのなか作業にご尽力いただきました作業員のみなさま、そして発掘調査をあたたく見守っていただいた地元の皆様に、心より厚くお礼を申し上げます。

平成27年3月

日田市教育委員会
教育長 三笥 眞治郎

例 言

1. 本書は、宅地造成事業に先立ち、平成25年度に市教育委員会が実施した慈眼山遺跡11次の発掘調査報告書である。
2. 調査は宅地造成工事に伴い穴井雪子氏・伊藤智子氏の委託業務として日田市が受託し、日田市教育委員会が事業主体となり実施した。
3. 調査にあたっては、穴井・伊藤両氏のほか、有限会社明代不動産および施工業者である株式会社石井建設の方々、また地元の方々にさまざまなご協力をいただいた。記して感謝申し上げます。
4. 調査現場での遺構実測は、森山敬一郎・財津真弓のほか、調査担当者が行った。
5. 調査現場での写真撮影は、調査担当者が行った。
6. 本書に掲載した遺物実測は調査担当者が行ったほか、雅企画有限会社に委託した成果品を使用した。遺物の製因は雅企画有限会社に委託した成果品を使用した。遺構の製因は高田美保の協力を得た。
7. 本書に掲載した遺物写真は雅企画有限会社に撮影を委託し、その成果品を使用した。
8. 挿入中の方位は、第3図は真北を示し、そのほかは磁北で表示している。
9. 写真図版の遺物に付した数字番号は、挿入番号に対応する。
10. 出土遺物および図面・写真類は、日田市埋蔵文化財センターにて保管している。
11. 本書の執筆・編集は、行時が担当した。
12. 報告にあたり、坂本嘉弘氏（大分県埋蔵文化財センター）のご教示・ご助言をいただいた。



日田市の位置

目次

I 調査の経過	1
II 遺跡の位置と環境	2
III 調査の記録	
(1) 調査の概要	3
(2) 層序	3
(3) 遺構と遺物	
1. 土坑	4
2. 溝	5
3. その他の遺物	7
IV まとめ	7

挿図目次

第1図 遺跡位置図 (1/5,000)	1
第2図 周辺遺跡分布図 (1/20,000)	2
第3図 周辺地形図 (1/1,000)	3
第4図 基本土層図 (1/40)	3
第5図 遺構配置図 (1/100)	4
第6図 1～3号土坑、1・2号溝実測図 (1/40、1/80)	5
第7図 出土遺物実測図 (1/4、2/3)	6



写真2 遺構検出状況

写真図版目次

図版1 調査区全景／1号土坑／2号土坑／3号土坑／1号溝	
図版2 2号溝／土層中の遺物(7層)／出土遺物	

本文写真目次

写真1 調査前風景	
写真2 遺構検出状況	
写真3 作業風景	
写真4 基本土層	3

表目次

第1表 出土遺物観察表	7
-------------	---



写真1 調査前風景



写真3 作業風景

1 調査の経過

平成24年4月12日付けで昭和建設株式会社（代理人：有限会社明代不動産）より市教育委員会あてに、日田市城町2丁目928番地1・928番地4・930番地について宅地分譲地造成工事に先立つ埋蔵文化財の所在に関する照会文書（事前審査番号2012022）が提出された。この開発予定地は周知の埋蔵文化財包蔵地である慈恵山遺跡に該当し、近隣ではこれまでに複数回の発掘調査が行われ中世を主とした遺跡が確認されていることから、当該地にも遺跡が存在する可能性が非常に高いことが想定されたため、その取扱いについて協議が必要である旨の文書回答を行った。その後5月16日には予備調査依頼が提出され、これを受けて5月24・25日に重機と作業員による予備調査を、休耕水田となっていた928番地4のうち位置指定道路予定部分を対象に実施した。その結果、現地表面から2m以上掘り下げても地山まで至らず、また著しい湧水のため明確な遺構は確認できなかったものの、遺物が相当量出土したことにより遺跡の存在が確認された。開発計画は全面盛土工法ではあるが、一部に上下水道等の埋設を伴う位置指定道路が予定されており埋設深度がこの時点では不明であったこと、928番地4については調査時の状況から工事にあたっては問題ないと判断されたが、ここより現況で約1m低い930番地については遺跡が損なわれる可能性があることから、930番地内位置指定道路部分を対象とした発掘調査の実施に向けて開発主と協議を重ねた。その後翌平成25年5月に同地同内容にて有限会社明代不動産より埋蔵文化財の取扱いについての照会文が提出され（事前審査番号2013016）、さらに開発主が個人（土地所有者2名）となる旨の連絡を受けたことから、契約相手を土地所有者2名として発掘調査の実施に向けて協議を行い、平成25年9月30日に事業主との委託契約を取り交わし、10月7日から同18日の間、発掘調査を実施した。その後平成26年7月1日から同31日の間整理作業を実施し、報告書作成を行った。現地での発掘調査の経過は次のとおりである。

10月7日 重機による表土除去および作業員による遺構検出開始 雨と地下からの湧水の処理に苦慮

10月16日 遺構掘り下げおよび測量・遺構実測開始

10月18日 器材撤収、現地での作業完了

なお、調査組織は次のとおりである。

平成25・26年度

調査主体	日田市教育委員会
調査責任者	合原多賀雄（日田市教育長／～26年6月） 三苫眞治郎（同教育長／26年7月～）
調査統括	財津俊一 （日田市教育庁文化財保護課長）
調査事務	園田恭一郎（同課埋蔵文化財係長） 武内貴彦（同専門員／25年度） 華藤善紹（同副主幹／25年度） 謙山温子（同主事／26年度）
調査担当	行時桂子（同主査）
調査員	若杉竜太・渡邊隆行（同主査）、 上原翔平（同主任）
発掘作業員	加藤祐一、河津定雄、合原建國美、 財津真弓、谷口芳枝、森山敬一郎
整理作業員	高田美保



第1図 遺跡位置図（1/5,000）

II 遺跡の位置と環境 (第1・2図)

慈眼山遺跡は盆地東部の、北側に慈眼山、東側に佐寺原台地を望む、沖積地上に位置する。この一帯は官庁や学校などが集中する地域であり、宅地造成を中心にこれまでに10次にわたる調査が行われている。

遺跡の北東側に位置する1～3次調査地では、古代・中世の遺構が検出されている。古代においては、建物は確認されていないものの、井桁組の井戸が発見されたことから、周辺に居住施設の存在が想定されると同時に、「林」「門」銘墨書土器の出土から公的施設や有力者の存在が推測され、古代日田の有力氏族である日下部氏との関係性が指摘されている。中世の遺構については、遺跡の南側を中心に実施された4～10次調査地において、14～16世紀の遺構・遺物が確認されている。これらの遺構は、大規模な土地造成をうかがわせる整地層に掘り込まれており、大藏姓日田氏から大友姓日田氏が支配した時期の城下町の様子を垣間見ることができる。さらに遺跡の北側から東側にかけては、日田氏の居城とされる大藏古城が広がっている。

次に慈眼山遺跡の周辺の遺跡を見てみると、南側に広がる大波羅丘陵東側の沖積地に大波羅遺跡がある。この遺跡では5次にわたる調査が行われ、大型の柱木を用いた柱穴列や「山」「田」などの銘をもつ墨書土器が出土しており、古代、特に奈良時代の官衙的施設の存在が想定されている。また大波羅遺跡の北東丘陵上には、大友姓日田氏滅亡後の日田を治めた八郡老の一人、堤氏の居城とされる堤城跡がある。

そのほかにも、遺跡東側の丘陵中腹には古墳時代中期の円墳と考えられている丸山古墳(市史跡)、台地上には弥生時代中期～終末期の集落が確認された佐寺原遺跡がある。特に終末期の竪穴建物からは炭化したアズキやイネ・アワ・キビなどが出土しており、当時の食生活や周辺環境を知る上で貴重な成果が得られている。また大波羅遺跡の東側の谷から丘陵上には弥生～古墳時代の墳墓群や溝・流路などが確認され、古墳時代の下駄が出土した赤迫遺跡がある。

次に遺跡の東側に目を移すと、豆田町を中心とした城下町遺跡が広がり、花月川を挟んだ北側の独立丘陵には1601年築城とされる永山城跡と古墳時代後期の月隈横穴群、その丘陵の南麓には永山城廃城後から幕末まで代官・郡代が置かれた永山布政所跡が存在する。一方、城下町遺跡の西側には、古墳時代後期の鉄鋸が出土した一丁田遺跡、南側には近世最大の私塾跡とされる史跡成宜園跡、古代の遺構が確認された日田条里四反畑地区や弥生～古墳時代の建物跡や溝が検出された日田条里飛矢地区などが存在する。このような状況から、慈眼山遺跡は古代以降、近世に永山城や豆田町が成立するまでは日田盆地における中心的な地域の一つであったといえる。

〔参考文献〕 坂本忠弘『慈眼山遺跡』大分県教育庁埋蔵文化財センター調査報告書第55集 大分県教育委員会 2011
日田市教育委員会発行の慈眼山遺跡その他関係遺跡報告書



第2図 周辺遺跡分布図 (1/20,000)

III 調査の記録

(1) 調査の概要

調査は予備調査時には田植えがなされていたため調査対象にできなかった930番地のうち、位置指定道路予定部分を対象に行った。稲刈りが終わり、工事業者による耕作土除去作業の完了後、調査対象地南側から重機で掘り下げた。予備調査時には遺構面まで深く明らかな遺構を検出することができなかったが、本調査の対象地は予備調査を実施した水田よりも現況で約1m低く、遺構面が予備調査時よりも浅い位置で確認される可能性があったため、慎重を期した。その結果、現況水田面からの深さ約90cmにおいて溝や土坑を検出するに至った。

調査で検出された遺構は、土坑3基、溝2条、ピットである。ピットについては調査区狭小のため掘立柱建物等の存在の確認には至らなかった。また、柱木等が遺存しているピットも見られなかった。以下、層序および遺構・遺物の説明を行う。

なお、今回の遺構検出面は前述のとおり現況水田面から約90cmの深さで確認され、工事計画との照合の結果、上下水道等の管工事により遺跡が損なわれる可能性がないことが判明したため、全発掘は行わず最小限の掘り下げに留め、真砂土により埋め戻した。調査に使用した重機および真砂土は、事業主の提供による。

(2) 層序 (第4図、写真3)

調査区南側東壁における土層の堆積状況については、次のとおりである。

第1層は現水田の耕作土、2層は現水田の基盤土である。3～5層はいずれも淡灰茶褐色粘質土であるが、4層は3・5層に比べて粒度が細かい。6層は1cm程度の小礫とともに、遺物を多く含む。7層は粘質土を基本としながらやや砂が混じり、粘質土と砂の細かい互層となっている。この層も

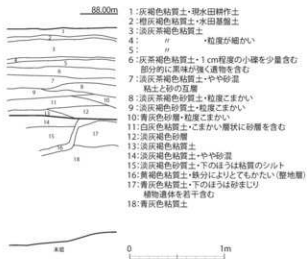
6層と同様に遺物を多く含む。8～13層は互層状を呈する。なかでも10層は青灰色の砂層で、水流があったことを想起させ



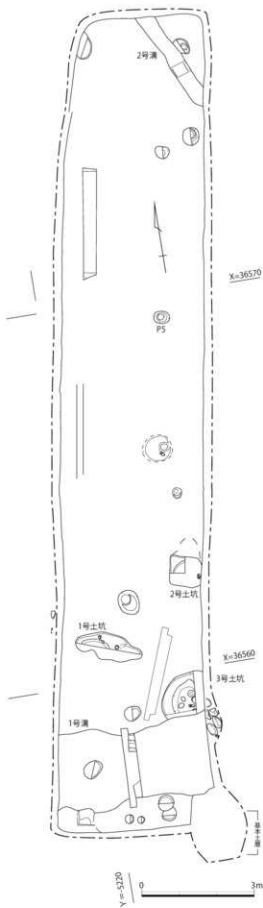
写真4 基本土層



第3図 周辺地形図 (1/800)



第4図 基本土層図 (1/40)



第5図 遺構配置図 (1/100)

る。今回の遺構検出面は14層上面（一部16層上面）で、やや砂混じりの淡灰褐色粘質土である。16層は黄褐色粘質土で、鉄分と合わさって硬い層となっている。図・写真の部分で不自然に下がっており、整地層の一部と思われる。17・18層は青灰色を呈することから水分を多く含むと考えられる粘質土で、17層は植物遺存体を少量含む。18層からは土師器裏が出土しており、古墳時代ごろの自然堆積層と考えられる。

(3) 遺構と遺物

1. 土坑

土坑は3基検出された。いずれも調査区南半で確認されている。

1号土坑 (第6図、図版1)

1号溝の北約2mで検出された。平面形は細長い不定形を呈し、検出面での規模は、東西約1.8m、南北約0.7m、深さは最大で10cmを測る。

この遺構からは、土師質土器環が3点出土している。

2号土坑 (第6図、図版1)

1号土坑の北東約2m、調査区の東端で検出された。平面形は検出面では方形を呈していたが、一部掘り下げた結果円形を呈するものと思われる。検出面での規模は、東西約0.8m、南北約0.8m、深さは最大で13cmを測る。ほかの遺構と異なり、黒味の強い埋土となっている。出土遺物に被熱痕が見られることから、何かを燃やした跡の可能性がある。

この遺構からは、土師質土器環が2点出土している。

3号土坑 (第6図、図版1)

2号土坑の南約2.3mで検出された。平面および3号土坑周辺の東壁土層を観察すると、1号溝に切られていることがわかる。平面形は円形を呈すると思われ、東側は調査区外へと続く。検出面での規模は、東西約1.1m、南北約2.4mを測る。湧水が著しく、地山まで完掘できなかったが、深さは20cm以上である。内部には人頭大の川原石が多数不規則に入っており、平面の形状や水気が多いことから、本来は井戸であった可能性が考えられる。

この遺構からは、土師質土器小皿が2点出土している。

土坑出土遺物 (第7図、図版2)

1～3は1号土坑、4・5は2号土坑、6・7は3号土坑から出土した土師質土器である。坏で底部が残存している1～4は底部外面に糸切り痕とともに板状圧痕が見られるが、6・7の小皿には糸切り痕のみで板状圧痕は見られない。色調は、1は灰白色を呈するが、その他はにぶい黄橙色～にぶい橙色を呈する。2号土坑出

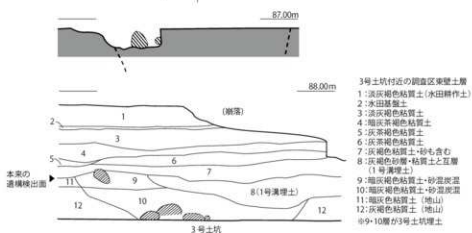
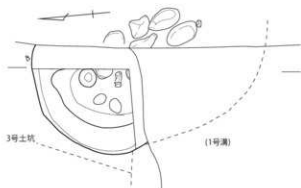
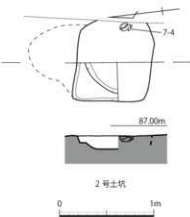
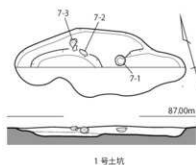
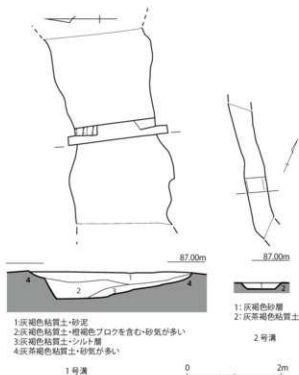
土の4・5はともに内面や口縁の一部に被熱痕が見られる。7の内面は被熱のためか赤褐色を呈する。

2. 溝

溝は調査区南端および北端で各1条、計2条検出された。

1号溝 (第6図、図版1)

調査区南端で検出され、調査区内を東西に横切り、両端とも調査区外へ続く。東端で3号土坑を切る。調査区内での検出規模は、長さ約4m、確認面での最大幅約2.2mを測る。断面形は浅いU字状を呈し、北側のほうが少し深くなっている。埋土は灰褐色粘質土を基本とし、レンズ状に堆積していることから、次第に埋没したものであると思われる。サブトレンチ掘り下げによる遺構の内容確認に留め、全体を掘り下げていないため、流れの方向は確認できないが、周辺地形が東から西に向かって下がっているため、この溝も東から西に向かって流れていたものと思われる。なお3号土坑付近を含めた調査区東壁の土層堆積の状況 (第6図



第6図 1～3号土坑、1・2号溝実測図 (1/40、1/80)

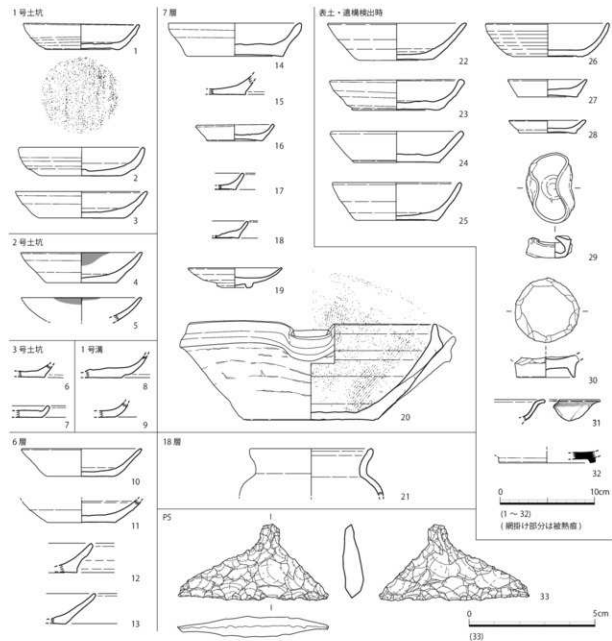
右下参照) から、11・12層が地山で、本来は今回の検出面より40cmほど高い位置から掘り込まれていたことがわかる。この遺構からは、土師質土器環が出土している。

2号溝 (第6図、図版2)

調査区北端の東隅で検出され、調査区内を東から北に横切り、両端とも調査区外へ続く。調査区内での検出規模は、長さ約3m、確認面での最大幅約0.4mを測る。断面形は浅い逆台形を呈す。埋土は1層で、砂が堆積していた。全体を掘り下げていないため流れの方向は確認できないが、周囲の地形から、東から北に向かって流れていたものと思われる。なお東壁の土層堆積の状況 (図版2) から、本来は検出面より少し高い位置から掘り込まれていたことがわかる。この遺構からは遺物の出土はなかった。

溝出土遺物 (第7図、図版2)

8・9は1号溝から出土した土師質土器環の破片である。8は外部底面に糸切り痕が残り、内外面ともにぶい橙色を呈する。9は外部底面に糸切り痕と板状圧痕が残り、内外面ともにぶい黄橙色を呈する。



第7図 出土遺物実測図 (1/4、2/3)

3. その他の遺物（第7図、図版2）

ここでは、調査区壁面や遺構検出中に出土したものと、遺構に伴わずに出土した遺物を記す。

10～13は基本土層の6層から出土した土師質土器である。14～20は同じく7層から出土した土師質土器・陶磁器である。特に20の播鉢は完形のまま逆さまに埋まっており、内部に14・15・18が入った状態で出土した。21は基本土層の18層から出土した土師器甕である。22～32は表土中および遺構検出時に出土したものである。土師質土器を主体としながら、白磁や青磁、須恵器も見られる。33は調査区中央北寄りのP5から出土した石甌である。長さ3.05cm、幅6.0cm、厚さ0.8cm、重さ9.27g。石材はサヌカイトである。

IV まとめ

今回の調査では土坑3基、溝2条、ピットと整地層が確認された。部分的な掘り下げに留めたため各遺構の明確な時期や変遷は比定し難いが、出土遺物から15世紀中頃～16世紀前半が主体となるようである。調査区内からは12世紀の白磁（第8図30）や13～14世紀と思われる坏（同26）・小皿（同7）も出土しており、周辺にその時代の遺構が存在する可能性を示唆している。また、第8図14・15・18・20はその出土状況から、15世紀後半の良好な一括資料といえる。

これまでの本遺跡では、中世は概ね15～16世紀を中心とした建物群やそれらに伴う大規模且つ短期間で行われた整地層が確認されている。今回の調査では建物などは認められないものの整地層の存在が確認され、これまでの調査結果を追認することができた。今後の調査にあたっては、新しい知見を得ることは言うまでもないが、これまでの調査内容を検証する視点をもって行っていく必要もあろう。

【参考文献】県・市発行の基山遺跡発掘調査報告書

東岡寛「備前焼跡跡の編年について」『第3回中近世備前焼跡研究会資料：中近世備前焼跡研究会 2000

第1表 出土遺物観察表

編年 番号	遺物名	期別	形状	正 造			逆 造			器 土	構成	色 調		備 考
				口縁	底径	高さ	内面	底面内面	内面			外面	内面	
7-1	1号土坑-1	1層底土層	坪	19.2	8.1	2.7	焼灰/F	赤褐色、靑灰白磁	F	AD	良好	灰白磁	灰白磁	
7-2	1号土坑-2	1層底土層	坪	13.0	8.4	3.0	焼灰/F	赤褐色、靑灰白磁	F、焼灰/F	AKC	良好	灰白・赤褐色	灰白・赤褐色	中・全土層
7-3	1号土坑-3	1層底土層	坪	13.0	8.8	2.8	焼灰/F	赤褐色、靑灰白磁	F	ABC	良好	灰白・赤褐色	赤褐色	1層底
7-4	2号土坑-4	1層底土層	坪	13.8	7.4	3.2	焼灰/F	赤褐色、靑灰白磁	F、焼灰/F	ABC	良好	灰白・赤褐色	灰白・赤褐色	1層底・2層に焼跡あり
7-5	2号土坑-1	1層底土層	坪	12.8	-	12.5	焼灰/F	赤褐色	焼灰/F	ABC	良好	灰白・褐色	灰白・褐色	1層底
7-6	2号土坑-2	1層底土層	小皿	-	-	1.4	焼灰/F	赤褐色	焼灰/F	ABC	良好	灰白・褐色	灰白・褐色	1層底
7-7	2号土坑-3	1層底土層	小皿	-	-	1.2	焼灰/F	赤褐色	F、焼灰/F	ABC	良好	灰白・赤褐色	赤褐色	内面は焼跡のため多量に土
7-8	1号溝	1層底土層	坪	12.3	-	12.3	焼灰/F	赤褐色	F、焼灰/F	ABC	良好	灰白・褐色	灰白・褐色	
7-9	1号溝	1層底土層	坪	11.1	-	11.1	焼灰/F	赤褐色、靑灰白磁	F、焼灰/F	ABC	良好	灰白・赤褐色	灰白・赤褐色	
7-10	6層	1層底土層	坪	12.8	7.2	2.9	焼灰/F	赤褐色	F、焼灰/F	ABC	良好	灰白・褐色	灰白・褐色	
7-11	6層	1層底土層	坪	7.2	12.4	12.4	焼灰/F	赤褐色	F、焼灰/F	ABC	良好	灰白・褐色	灰白・褐色	
7-12	6層	1層底土層	坪	-	-	3.1	焼灰/F	赤褐色	焼灰/F	ABC	良好	灰白・赤褐色	灰白・赤褐色	
7-13	6層	1層底土層	坪	-	-	3.2	焼灰/F	赤褐色	焼灰/F	ABC	良好	灰白・赤褐色	灰白・赤褐色	
7-14	7層-1	1層底土層	坪	14.2	19.2	3.5	焼灰/F	赤褐色、靑灰白磁	F、焼灰/F	ABCDC	良好	灰白・赤褐色	灰白・赤褐色	
7-15	7層-1	1層底土層	坪	-	-	12.0	焼灰/F	赤褐色、靑灰白磁	F、焼灰/F	ABC	良好	灰白・赤褐色	灰白・赤褐色	
7-16	7層-2	1層底土層	小皿	8.1	5.9	1.7	焼灰/F	赤褐色、靑灰白磁	F	ACD	良好	灰白・褐色	灰白・褐色	
7-17	7層-3	1層底土層	小皿	-	-	1.7	焼灰/F	赤褐色	F、焼灰/F	ABC	良好	灰白・赤褐色	灰白・赤褐色	
7-18	7層-4	1層底土層	小皿	-	-	1.8	焼灰/F	赤褐色	焼灰/F	ABC	良好	灰白・赤褐色	灰白・赤褐色	
7-19	7層-5	1層底土層	甕	10.0	3.7	2.1	焼灰/F	赤褐色・赤褐色			良好	灰白磁	灰白磁	中国産、15世紀前半
7-20	7層-1	2層	磁器	30.4	14.2	10.5	焼灰/F	赤褐色、F	ベージュ、F	F	良好	赤褐色	赤褐色	厚肉厚口平・蓋付、15世紀前半
7-21	18層	1層底土層	甕	12.8	-	15.0	焼灰/F	赤褐色のため不明		BCD	良好	灰白・赤褐色	灰白・赤褐色	
7-22	-1	1層底土層	坪	14.7	7.9	3.9	焼灰/F	赤褐色	F、焼灰/F	ABC	良好	靑褐色、灰白・赤褐色	靑褐色	
7-23	-2	1層底土層	坪	13.7	8.3	3.2	焼灰/F	赤褐色、靑灰白磁	F、焼灰/F	AD	良好	灰白・褐色	灰白・褐色	
7-24	-3	1層底土層	坪	14.1	9.0	3.3	焼灰/F	赤褐色、靑灰白磁	F、焼灰/F	ABC	良好	灰白・赤褐色	灰白・赤褐色	
7-25	-4	1層底土層	坪	13.7	8.6	4.0	焼灰/F	赤褐色、靑灰白磁	F、焼灰/F	ABC	良好	灰白・赤褐色	灰白・赤褐色	
7-26	-5	1層底土層	坪	13.2	7.4	3.5	焼灰/F	赤褐色、靑灰白磁	F、焼灰/F	ABC	良好	灰白・赤褐色	灰白・赤褐色	1層底面のACに赤褐色
7-27	-6	1層底土層	小皿	8.2	6.4	1.9	焼灰/F	赤褐色、靑灰白磁	F、焼灰/F	AD	良好	灰白・赤褐色	灰白・赤褐色	内面全体が赤いより赤褐色
7-28	-7	1層底土層	小皿	8.2	6.0	1.3	焼灰/F	赤褐色	F、焼灰/F	ABC	良好	灰白・赤褐色	灰白・赤褐色	
7-29	-8	1層底土層	柱礎	-	-	2.3	焼灰/F	赤褐色	焼灰/F	ACD	良好	灰白・赤褐色	灰白・赤褐色	柱径：7.5cm
7-30	-9	2層	甕	-	6.2	12.3	焼灰/F	赤褐色			良好	灰白磁	灰白磁	打欠き・中国産、15世紀
7-31	-10	青磁	甌	-	-	2.3	-	-	-	良好	オリーブ灰色	オリーブ灰色	胎土厚、15世紀、外面に片断の 蓮文文	
7-32	-11	銅鏡	坏	-	-	1.1	-	-	-	良好	灰白磁	灰白磁		

注：単位はcm。(1) 書きは焼付または焼印。器土：A 良好 C 良好 D 赤褐色 F 灰白磁 G 赤褐色 H 焼灰



調査区全景 (南から)



調査区全景 (北から)



1号土坑 (南から)



1号土坑遺物出土状況



2号土坑 (西から)



3号土坑 (北西から)



1号溝 (西から)



1号溝土層



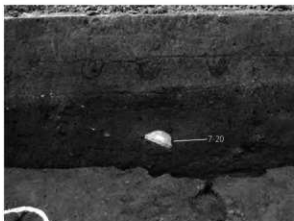
2号溝（西から）



2号溝付近土層



2号溝土層



土層中の遺物（7層）



7-1



7-3



7-4



7-16



7-10



7-14



7-19



7-20



7-21



7-29



7-31



7-33

報告書抄録

ふりがな	じげんざんいせき 11 じ
書名	慈眼山遺跡 11 次
副書名	
巻次	
シリーズ名	日田市埋蔵文化財調査報告書
シリーズ番号	第 120 集
編著者名	行時 柱子
編集機関	日田市教育庁文化財保護課
所在地	〒 877-0077 日田市南友田町 516-1
発行機関	日田市教育委員会
所在地	〒 877-8601 日田市田島 2-6-1
発行年月日	2015 年 3 月 31 日

所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	発掘期間	発掘面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
慈眼山遺跡 11 次	大分県日田市城町 2丁目	44204-6	204134	33° 19' 47"	130° 56' 38"	2013107 ～1018	88㎡	記録保存調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
慈眼山遺跡 11 次	集落	中世	土坑3基、溝2条、ピット・整地層	土師質土器・陶磁器・須恵器 土師器・石器	

要 約 慈眼山遺跡はこれまでに 10 次にわたる発掘調査が行われており、15～16 世紀を主とした武家屋敷群などが確認されている。

今回の調査地は屋敷群の一部が確認された 5 次調査地の北にあたり、現況水田面から約 90cm の深さで土坑・溝・ピットが確認された。溝はいずれも自然地形に沿って概ね東から西方向に流れるものと思われる。土坑のうち 1 基は湧水のため掘り下げることができなかったものの、内部に人頭大の川原石が多数見られたことから、石組みの井戸であった可能性が考えられる。調査区内においてピットが複数個確認されているが、調査区狭小のため掘立柱建物が成立するかどうかは確認できなかった。また遺構検出面までの土層中、特に基本土層の 6・7 層には多くの土師質土器や陶磁器が含まれており、しかもそれらには時期差がほとんど見られないことから、短期間のうちに造成が繰り返されたというこれまでの周辺での調査結果を追認することができた。

慈眼山遺跡 11 次

日田市埋蔵文化財調査報告書第 120 集
2015 年 3 月 31 日

編集 日田市教育庁 文化財保護課
877-0077 大分県日田市南友田町 516-1
発行 日田市教育委員会
877-8601 大分県日田市田島 2-6-1
印刷 山本印刷工業株式会社
877-0059 大分県日田市大日町 3986-3



日田市